

クリスマスメッセージ

インマヌエル—神はだれと共におられるのか？

瀬戸英治 (日本基督教団鶴川教会牧師・NPO 法人外国人
教育生活相談センター「信愛塾」副理事長)

クリスマス物語の主人公は、強大な軍事力を持ったローマ帝国に支配されているユダヤの国の中で、まるで難民のような生活を強いられていた一組の若いカップルです。彼らのごく平凡な生活をし、もうじき結婚することを楽しみにしていました。そんな中でマリアは妊娠します。ヨセフにとって身に覚えがないことでした。ユダヤの法律ではマリアの妊娠は許されないことです。離縁されることも、そしてヨセフの対応次第では命さえ保障されない状況になります。でもヨセフは動揺しながらも、マリアを受け入れることを決心します。それは天使が「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる」(マタイ 1:23) という旧約の預言者イザヤの言葉を告げたからでした。

イエスからおよそ 730 年前、大国アッシリアの台頭に、浮き足立ったエフライム (当時南北に分かれていたユダヤ王国の北側) はシリアと同盟を組んで対抗し、同盟に加わるよう南王国にも圧力をかけてきました。南の王アハズは動揺し、アッシリアに救い求めようとします。これに神は怒ります。預言者イザヤを使い、力に頼ることの愚かしさを諭し、シリアもアッシリアも神の手の中にあり、神に信頼すれば南王国は滅ぼされることがないと告げます。しかしアハズ王はそれでも信じようとしません。そこで神はしるしを与えます。それは一人の若い女性が戦渦の中でも子どもを産んでいく、そして産まれる子は「インマヌエル 神われらと共にいます」と呼ばれること、この子が成長するまでに戦争は過ぎ去るということでした。ヨセフは、無事に産み育てるための何の保証もない状況の中でも、子どもを産もうとする名もない女性にマリアを重ねました。神を信じるとは絶望の中でも希望をつないでいくことだと気づかされたのです。

横浜の観光名所、元町の玄関である JR 石川町駅から、川沿いに 5、6 分上ったところに小さな学習塾があります。NPO 法人外国人教育生活相談センター「信愛塾」です。週日の午後、学校の授業を終えた子どもたちがランドセルを背負って、この塾にやってきます。中国語、タガ

ログ語、ベトナム語など、様々な言葉が飛び交います。ここは外国から来た子どもたちが日本の学校の授業についていけるように、国語や社会、数学などを教えるボランティアの学習塾なのです。学校の先生によれば、彼らの多くは学校では身を小さくしおとなしくしているそうです。でもここには仲間いて、母国語で話すことができ、学校の先生たちが驚くほど、別人のようにのびのびしています。

信愛塾では日本語だけでなく彼らの母国語も教えています。ここに通う子どもの中には、いわゆる「不法入国者」の両親から日本で生まれたものも少なくなく、自分の国の言葉さえ話せない子どもがいるからです。実はこのような子どもを守る日本の法律はありません。いつ親の不法就労が摘発され強制送還されるか、毎日ビクビクして暮らしているのです。日本も批准している「子どもの権利条約」も機能していないのが現状です。いま日本の中に、無権利状態におかれ、将来に希望を持つことさえ許されない子どもたちが存在することを知ってほしいのです。

しかし同時にその子どもたちには大きな可能性があります。もしクリスマスのヨセフのように、日本の人々が寄り添い、生活と学習を保証すれば、彼らは日本とその国を結ぶ架け橋になるからです。馬小屋で産まれたイエスが全人類を救ったように、彼らはグローバル化という世界の中できっと大きな力となってくれと信じています。インマヌエルの神はどのようなものと共におられるか？ クリスマスを通して考えてみませんか？